

## 美術の窓 (164)

## 矢代先生、小山先生、ロア先生

大和文華館評議員、兵庫県立美術館館長 みの ゆたか 蓑 豊

本日は私の26年間の、カナダ、アメリカの体験をかいつまんで話してみたいと思います。

まず最初に、私が慶應の学生の時に大変お世話になった著名な美術史家、矢代幸雄先生。矢代先生は日本の大学で美術史を勉強なさり、そのあとヨーロッパに渡り、その当時のイタリア・ルネッサンスの大変な権威でいらしたベレンソン教授について勉強し、そこでポツティチェリの論文を書き、博士号をとり、日本に帰られて東京美術学校（現在の東京芸術大学）の教授に就任されました。日本近代美術の発展に寄与した横浜の原三溪氏に大変可愛がられ、原さんのコレクションを鑑賞する機会を得られました。そして、東京文化財研究所をつくり、奈良に素晴らしい大和文華館のコレクションの核をつくられ、初代館長を務められた方でございます。卒業する前にどうしても矢代先生にお会いしてご意見を伺いたく、大磯のご自宅へ訪ねまして、「慶應を卒業したらどうしてもアメリカの美術館で勉強したいのです。頼みますから紹介状を書いてください」とお願いしたところ、「いま行ってはいけない、日本にいる時にしっかり一つの専門をつくり、それからアメリカへ行きなさい」といわれ、まず最初に東京の古美術商に住込みで入りました。

その当時、大学出の住込みはなかったと思います。そこで3年半、鑑賞学をじっくり勉強しまして、そのあと小山富士夫先生という世界的な陶磁学者に呼ばれまして、「トロントのロイヤル・オンタリオ・ミュージアムで、中国陶器のわかる若い

人を探しているから君が行きなさい」といわれまして、とても喜んで飛び上がって「はい」という返事をしたのを覚えています。そのあと、英語が全くしゃべれませんでしたから、これからどうしようと思いましたが、1968年暮れに横浜から船でサンフランシスコへまいりました。その船上で一通の電報が私に届きました。それは小山先生からで、「学者になるまで帰国するな」というそれだけの文面でしたが、その電報が私の人生を変えてしまったと思います。

まず最初に、ミシガン大学で数か月英語の勉強をいたしまして、そのあと1969年カナダのトロントのロイヤル・オンタリオ・ミュージアムで、中国陶器の数千点にのぼるコレクションを調査、そしてカタログを書きました。夜はその図書室で中国から出ているいろいろな報告書を読み漁り、そこで中国の古陶磁の索引を作り、それを初めて出版させてもらいました。その本が認められて、ハーバード大学大学院に入学することができました。

ハーバード大学には当時大変著名な東洋美術学者のマックス・ロア先生という方がおまして、その先生の下で勉強することができました。さっそく私の慶應時代の恩師の守屋謙三先生から手紙が届きまして、「私の最も尊敬するロア先生について習うということは大変光栄なことである」といわれ、益々勇気が出て勉強したのをよく覚えております。

アメリカでは個人に投資します。それは私のような外国人でも、勉

強し、優秀な成績を収めさえすれば援助してくれます。その援助のために、私自身も頑張りました。その時にいろいろな苦しいこともありましたけれども、その中で私の心を支えてくれたのは、私が今日のような慶應の卒業式のあと、すぐ横浜から東海道線で岐阜にある小さな禅寺に入り、そこで修行したことです。朝5時に起こされて庭掃除をしるといわれ、その庭掃除で何度も辞めようかと思いましたが、これをいま辞めたらあとで笑い者になると、最後の最後まで掃き、そのときの喜びは一生忘れることはありません。諦めずにただやる、その喜び、ハーバードの一番苦しい時にそのことをいつも思い出し、助かったと思っております。皆様もやればできますが、やらなければできないということをよく自覚してほしいと思います。

もう一つ私が一番苦しかった時に支えてくれたことは、1964年初めてエジプトの中東調査団に参加した時ですが、調査が終りそのお礼として、当時まだ1ドルが360円の時ですが、500ドルをキャッシュでもらっていて、そのお金を大事に持って、約2か月ヨーロッパ、アメリカの美術館を回りました。そして日本に帰る数日前ハワイに立ち寄り、その時に500ドルが無くなっていることに気づきました。その時、その500ドルを絶対にアメリカへ行って取り返すという決意をしたのをよく覚えております。その決意が7年後に初めてハーバード大学から奨学金を5000ドルもらうことによって、ついに達成されたと思えました。それから13年後にはインディアナポリス美術館の東洋部長、20年後にはシカゴ美術館の東洋部長になりました。あの500ドルを失っていなければ、いまの私はなかったかもしれません。500ドルを盗まれたことで、アメリカから必ず取り返すという、そういう

決意をしたのをよく覚えております。

それからハーバード大学での勉強で一番苦しい時のことで皆さんに一つ覚えていてほしいのは、自分のことは自分自身が一番よく知っているということです。だから見栄を張らずに、自分をしっかりみつめて、あまり焦らずじっくり一つ一ついい仕事をすれば、必ずいい方向にいくと思います。ただ、運を待つのではなくて、運は自分で運んでくる。中国では昔から「運」という字は車で運ぶと書いています。やはり車で自分で運ばなければ、運は必ずきません。だから一所懸命に働いてよく努力して、いいことを自分で持ってきてほしいと思います。

それから最後に、矢代幸雄先生が1960年に『芸術新潮』の12月号にお書きになった、いい文章がございます。読ませていただきます。

“国立博物館はいいけれども、官僚の仕事であって、どうもつめたくて重苦しいところを除去できない。美術の本質というものは決して単なる学問でもなく、また単なる教養でも信仰でもない。それは何よりも先に美という人間の心にかかると通ずる欲びによって、世の中を美しくし、人生を楽しむもの、そういう意味の美を民衆とともに味わって、世の中を善くし、また国際関係にも美をもって働きかける美術館……”

私もこれから美しい、また楽しい、そして民衆と共に味わえる美術館建設のために頑張っていきたいと思っております。皆さんも一つの大きな夢を持って、また自信を持って、羽ばたいて飛び立ってください。

【本稿は、『三田評論』1995年5月号に掲載された、1994年度慶應義塾大学卒業式来賓祝辞の一部を編集したものである】

季刊 美のたより No.222

令和5年3月31日

発行 大和文華館